

# FWU

MAGAZINE

福岡女子大学広報

No.118 | 2022  
AUTUMN

(創立100周年プレ特集号)

特集

應地 恭子 先生インタビュー  
自由な発想を大切に

100年に想うこと

半世紀前の半人前  
名誉教授 今井 明

環境経済学およびエコロジー経済学の100年の変遷  
環境科学科 講師 竹内 亮

1923年の「はじまり」からつながり環る建築の旅  
環境科学科 准教授 若竹 雅宏



未来を拓くなでしこの花  
100th-2023  
FUKUOKA WOMEN'S  
UNIVERSITY



公立大学法人  
**福岡女子大学**  
FUKUOKA WOMEN'S UNIVERSITY

〒813-8529 福岡市東区香住ヶ丘1-1-1  
Tel.092-661-2411(代表) Fax.092-661-2420  
<http://www.fwu.ac.jp/>

福岡女子大学広報 No.118 / 2022 AUTUMN  
編集発行 福岡女子大学 戦略企画センター  
2022.10 発行

新型コロナウイルス感染症の感染防止の為、インタビュー、イベント時には手の消毒・マスクの着用を徹底し、換気を十分に行いながら実施しています(写真撮影時のみ、マスクをはずして撮影しています)。

## Contents

### 特集

03-06 應地 恭子 先生インタビュー  
自由な発想を大切に

### 100年に想うこと

07-10 半世紀前の半人前  
名誉教授 今井 明

11-14 環境経済学およびエコロジー経済学の100年の変遷  
環境科学科 講師 竹内 亮

15-18 1923年の「はじまり」からつながり環る建築の旅  
環境科学科 准教授 若竹 雅宏

19-22 FWU TOPICS／海外留学インタビュー ～From and To～

23 受賞／人事消息

24 編纂の寄り道

25-26 福岡女子大学 100周年記念事業



[表紙] 福岡女子大学須崎キャンパス遠景(1933年頃撮影)  
キャンパス手前の白い橋は旧洲崎橋で、中洲から博多湾を望む方向で撮影されている。1937年の火災で校舎のほとんどが焼失したため創立時の須崎キャンパスを伝える貴重な写真。

## 四月の私

應地 恭子

なぜか涙が出て  
胸が痛くなつて  
おしまいに声を出して  
泣いてしまふんだよ  
辛いからね 生きることは

生きることって そんなに辛いこと？  
そう自分が誠実であればあるだけ  
優しければ優しいだけね

でも世の中の当たり前を  
自分の頭の中にしつかり叩き込んで  
認識させてしまえば  
涙なんか出なくなるよ

二枚舌を使い  
弱いとみたら襲いかかり  
自分より凄い人に罠をしかけ

こんな世の中の当たり前を  
認識してしまつたら  
いつもクックツツと笑っていられるよ

だって黒い洋服を着たマジョリティの中で  
自分の顔を出さずにすむからね

私は駄目だよ  
やつぱり

おしまいに声を出して泣きたいよ  
人のためにも 自分のためにも  
黒い洋服なんか着たくないよ

「画文集 折々の私」(弦書房)より



おおじ きょうこ  
應地 恭子 (1929年～)

福岡県立女子専門学校数学科(当時)から九州大学理学部化学科に進学。筑紫女学園高校教員から米ロードアイランド大学海洋学部へ留学。帰国後、東海大学、福岡教育大学で教鞭を執る。米国生活のエッセー「Little Rhody 小さなアメリカの中で」や画文集も出版。理学博士。

# 自由な発想を

## 大切に

本学の前身の福岡県立女子専門学校を1948年に卒業し、戦後の学制改革による新制九州大学に女性として初めて入学した應地恭子さん。九大卒業後は海洋火山の研究者や大学教員として活躍された女性の社会進出のパイオニアです。福岡市早良区のカフェで、93年の半生を振り返っていただきました。



おおじ きょうこ  
應地 恭子 先生(女専23回生)

1929年(昭和4年)1月生まれ。福岡県立女子専門学校数学科(当時)から九州大学理学部化学科に進学。筑紫女学園高校教員から米ロードアイランド大学海洋学部留学。帰国後、東海大学、福岡教育大学で教鞭を執る。米国生活のエッセー「Little Rhody 小さなアメリカの中で」や画文集も出版。理学博士。

### 「学問の基礎」数学を学ぶ

―北九州市にお生まれですが、幼少時代は、どのようにお過ごしでしたか？

若松市(当時)で生まれました。旧制中学で数学を教えていた父の転勤に伴い、大牟田や田川など県内を転々と引っ越しました。父はその後校長になり、「校長先生のお嬢様」として周囲から大切にしてもらいました。

### ―福岡県立女子専門学校へ入学された動機を教えてください。

父の影響で学問に興味を持ち、自然と女専(福岡県立女子専門学校)に進学しました。選んだのは数学科。「分からない問題は父に聞こう」という安易な気持ちがあったのです。須崎(現在の中央区天神)にあった校舎で学んで、空襲で焼けたので現在の新天町付近にあった仮校舎で学びました。

### ―女専時代の先生や同窓生との思い出を教えてください。

優秀な同級生が多く、学問には厳しいけれど人間味ある数学の先生にも巡り合えました。しかし、「問題を解けば良い」と考えていた私にとって、数学は「哲学」のような難しい世界でした。ただ、「数学は学問の基礎。どの道に進むのにも必要」と理解していました。

寮生活をしましたが、当時は、戦

後間もない時代だったので食べ物がなく、皆おなかぺこぺこ。「内職」と称して寮生で食事をつくって食べていました。みんなで助け合った時代でした。

### 父から自立し化学の道へ

―卒業後は数学科ではなく、九州大学理学部化学科に進まれた理由を教えてください。

敗戦で米国流の新しい教育制度が日本に導入され、女子が九州大学を受験できるようになりました。「こんなチャンスはない」と理学部化学科を受験し、合格しました。元々、大学に進めたら数学ではなく、好きな学問を選ぼうと考えていました。実験をしたこともないので、なぜか化学が好きだったのです。

ただ、受験も合格も学科で女子は私一人。戦地から戻った学徒兵もいらっしやあって、うまく紛れ込むことができました(笑)。自分の道を自分で選び、父から自立した瞬間でした。

―当時の九州大学では、女子学生は極めて珍しい存在ではなかったでしょうか？

戦時中まで学問をする男子は旧制中学、女子は女専と分かれていました。大学に進む女性は極めて少なく、女専は「学問はここで終わり」という雰囲気だったのです。旧制中学出身の男子とは学力でかなりの差を実感しました。

学術論文は英語なので、研究の道に進むなら英語は必須。女専で学んだ英語より高いレベルの英語が求められました。一生懸命に勉強して単位を取り、何とか卒業にはこぎつけました。



### 高校教員から米留学へ

―九大卒業後は、どのような職業を選択されたのでしょうか？

研究の道はいつたん断念し、筑紫女学園高校に化学の教員として就職しました。しかし、研究を続けたい気持ちが抑えきれず、「担

だけ1年間残って研究を続けました。「思う存分研究ができる」「夫に勝ったぞ〜！」と思いました。夫から自立できる機会でしたし、夫の理解もとてもありがたかったです。

米国の教員は生徒の誤った考えを頭から否定しません。どう間違っているかを分かりやすく教えます。また、日本では高校生を目標とする大学に合格させるための指導をしますが、米国では高校で学ばせて「研究者に向くか」を判断して「どの大学にこういう先生がいる」と大学を選んで進ませます。さらに学んだことを基礎に自由に発想し、不合理なことや疑問には毅然と自己の考えを表明する。そのような訓練ができる環境があったのが印象的でした。

帰国後の私は東海大学などで教鞭を執り、東北大学で博士号の学位を受けました。

### 自由な発想育む教育を

―日本の女子教育についてのお考えをお聞かせください。

奈良女子高等師範学校（現奈良女子大学）で学んだ母は私の九大進学に理解があつて、当時から「学問の世界は美しいよ」と教えてくれました。昔は男女が分かれて教育レベルの差がありました。今は差がなくて能力次第。女性にとって幸せな時代だと思いますし、政治家なんて女性が増えて喜ばしいですね。

―現在の日本では、男女共同参画という言葉が強調されています。このような社会の動きについて、どのようにお考えでしょうか。

とても好ましいと思います。男女は同等です。得意分野は違うかもしれませんが、良い学校を出たから良い子ではなく、それぞれ違った能力を持つ

任は持たせないでほしい」と要望をしたら理解していただき、研究室まで設けていただきました。化学部のクラブ活動の指導をしながら論文

を書かせてもらったことが米留学につながりました。ただ、クラブ活動では生徒にテーマを持たせて、資料の収集、論文の書き方など学問の本質をきちんと指導しましたし、その生徒たちが大学に進学しました。女性も頑張ればできると確信しました。

―米ロードアイランド大学に留学されました。留学で何を専門に研究されていましたか？ 留学時代の苦労などがあれば、教えてください。

米国では大西洋の海底を北極から南極まで縦に貫く大火山脈を研究しました。当時、誰も研究していなかった新しいテーマでした。

やはり英語で苦労しました。英語の論文をすらすら読めない前に進めず、教授らと意見が合わなかったら英語で議論しなければいけません。必死に学び、会話も一生懸命に覚ええました。

夫（善雄氏＝故人）も同時期、同じ大学に地質学の研究のために留学したのですが、イギリス英語を学んでいたため、会話が通じず苦労していました。

―留学時代の印象的な思い出や貴重な体験などがあれば教えてください。

少し前まで敵国だった米国でしたが、皆さん親切。連れて行った娘3人も楽しんでいました。主人と娘3人が先に帰国したあと、私

ています。一人二人の能力を生かすのが本当に良い社会だと思ひますし、自由な発想をさせる教育をもっと大切にしてほしいです。

―福岡女子大学は来年100周年を迎えます。現役学生は約7割が海外留学を体験します。大学の基本理念は「次代の女性リーダーを育成」です。学生たちへのメッセージをお願いします。

私の若い時、「女は研究者に向かない・学問は女学校まで」と言われていましたが、問題を解くことが数学ではないということを知った時から私の学問が始まりました。その時代から現代まで生きてこられたことに幸せを感じます。

後輩の在学生の皆さんは、しっかり勉強して、それを基礎に自分の考えを創造してください。そして、上下に関係なく、不合理なことや疑問には毅然と自己の考えを表明し、リーダーを目指して日々努力を重ねていただきたいと思ひます。



聞き手・庄山茂子副学長

本学の家政学部卒業後、奈良女子大学大学院修了。九州芸術工科大学大学院修了。博士（芸術工学）  
教務企画センター長、教育・学習支援センター長  
専門分野は環境デザイン学。

## 半世紀前の半人前



## 名誉教授 今井 明

早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻。博士課程後期単位取得満期退学。1992年より本学に着任。  
2011年より理事・副学長を務め、2019年に退職し、現在は本学名誉教授。  
説話文学、仏教文学、軍記物語を中心に研究し、古典文学関係の資料の発掘・紹介にも努める。  
平安時代末期から鎌倉時代初期の公家・歌人 藤原定家の研究にも従事。

中学校の国語は俳句漬けだった。川名大先生は熱心に俳句について語った。それがどんなに幸せなことであつたか、まったくわかっていなかった。いや、ちくま学芸文庫の『現代俳句』を目にするまで、私は自分の幸運を認識したことはなかった。高校受験はなかったため、教科書を放り出して俳句の研究レポート作成にいそしんだ。くだらない発表とユニークな発表の違いはわかるようになっていった、と思う。

高校一年の時、川名先生は我々の前から去った。ことばの美しさや面白さに気づき始めていた私は俳句以外、何かもう一つ欲しくなっていた。

「詩」をやるなら、ボードレール、ランボーだ。『悪の華』や『地獄の季節』を読まなければ、「詩」はわからない、語る資格はないと言われた。小林秀雄や大岡昇平もフランス文学を勉強して、偉い評論家・小説家になった。夭折した詩人・富永太郎もボードレールの詩を貪欲に吸収した詩人であつた。「サンボリスト」象徴派詩人として、評論家や小説家に墮落した小林や大岡より、「私には群衆が絶対が必要であつた」とうたった富永は遙かに優れた文学者、本物の詩人である、とされた。

こうした雰囲気の中でまっすぐに育つたY君は大学進学後フランスへ留学し、阿部良雄（『群衆の中の芸術家』を書いたフランス文学者）を超えるべく奮闘していた。小学校以来の友人であるY君は、呑気な私を教育することに熱心で、モーツァルトを聴けとか、この本を読めとかまことに親切であつた。「疾走する悲しみ」をわから



せようと、交響曲40番のレコードと小林秀雄の「モーツァルト」を貸してくれた。残念ながら我が家にはステレオはなく、蓄音機系の機器で何とか聴いたが、「疾走する雑音」を聴いただけだったような気がする。

のちに大学のフランス文学の教授として活躍するY君は、いつも私の遙か先を歩いていたが、別にうらやましいとは思っていなかったと思う。ただ、彼から「おまえはどうするのだ」と問われた時に、何も答えの用意がない自分を発見したのは確かであつた。



コリン・ウィルソンの『アウトサイダー』を持つてきたのも、Y君であった。「アウトサイダー」ということは自体、その頃の取り残された自分の立場を指摘されたようで、何となく心引かれ読んだ。小林秀雄の「世捨て人とは、世を捨てた人の謂いではない、世から捨てられた人のことをいう」（西行論）といった言葉がしみじみと思いついた。だが、相変わらず具体的には何を課題とすればよいのか、自分は何を欲しているのかさっぱりわからなかった。

まとまりのない言葉に囲まれて、うんざりしていた時に、偶然手に取った本があった。読もうと思ったのではなくパラパラとページをめくると、「象徴」とか「ボードレール」とか聞いたことのある単語が見えた。論じられていたのは藤原定家であった。定家とボードレールを結びつけて論じた文章など、ついぞ見たことがなかった。これを書いたのは誰だ、と思った。

石田吉貞は戦後の定家研究の第一人者だった。敗戦を機に自家の農業の仕事を捨てて上京、ほとんど独学で研究を推し進めた。文献資料を博搜し、客観的に論考を構築していくことに苦心していた。戦前の歌人兼研究者たちの鑑賞的、直感的な歌人論から離れ、極力「科学的」な方法で研究を打ち立てようとした。一方、定家の和歌を「象徴主義」と評する柔軟さもあった。藤原定家と象徴、ボードレール、文献探索など、当時の私には新鮮な、未知なる世界であった。石田のような「国が減んだ」といった深刻な動機は、私にはどこ



20歳ごろの著者

を探してもなかったが、それでもようやく定家や中世和歌の研究に興味を持ち始めた。ただ、『香椎潟』のような研究誌を読むには、まだ数年の時間が必要であった。

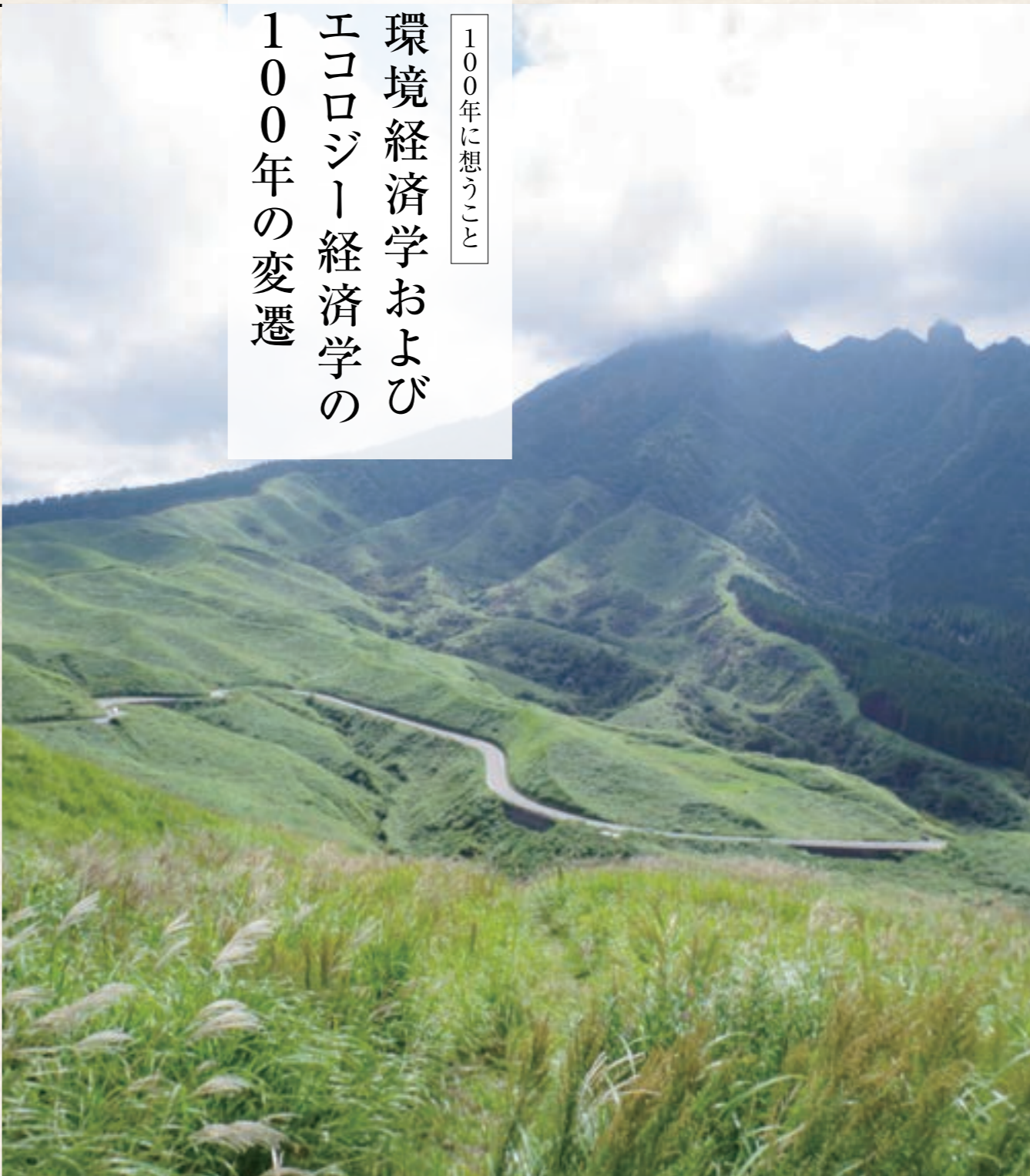
現在、定家の研究者が、「象徴主義」とか「ボードレール」といった言葉をストレートに用いることはない。そうした外国の文学の概念の手を借りずに、自分たちの言葉で和歌を解明したいという気持ちからであろう。

しかし、定家の日記に出てくる憂鬱を、遠く離れたフランスのボードレールの憂鬱と重ね、響き合わせてその声を聞こうとするのは、文学の面白さ、自由を味わえるような気がいままする。石田の『藤原定家の研究』（一九五七年初版 一九七五年再版 文雅堂銀行研究社）は、戦後の日本の文学状況のひとつの「意匠」として評価することもできるのではなかろうか。

昨年ある研究誌に石田吉貞の論考を真正面から批判する論文を書いた。初めて石田の著作を読んでから約半世紀、50年間ずうっと考えてきたテーマだと言えは嘘になるが、ずうっと提出できずにいた宿題をやっと仕上げる事ができたという思いはあった。内容が一人前になっているかは心許ないが、半人前だった私が課題を持って、何とか生きてこられた幸せをあらためて噛みしめている姿は、何となく「二人前」風なのである。

100年に想うこと

## 環境経済学および エコロジー経済学の 100年の変遷



環境科学科 講師 竹内 亮

同志社大学経済学部での里山保全活動を通じ、自然資源の管理に興味を持つ。  
卒業後、京都大学大学院経済学研究科に進学し環境経済学およびエコロジー経済学について学ぶ。  
ベトナム国家大学へのフィールド研究滞在を経て、2018年に博士学位(経済学)を取得。

2020年度より現職に就任。

現在は身近な自然資源の活用や、新しい管理方法について、阿蘇の草原をフィールドにして学生と精力的に研究中。

趣味はトレッキングとビール。

私の専門分野である環境経済学、エコロジー経済学の100年間の変遷をテーマに書くという内容、引き受けた後に「どうしようか」という気持ちがあった。というのも学問分野の100年といったテーマは本来、私のような若手が執筆するのもおこがましいが思い切って書いてみる。紙幅の都合上、ところどころ大雑把な解説であることをご承知おきいただきたい。

環境のつかない経済学(Economics・エコノミクス)は、古代ギリシャにおける家政術(Oikonomia: オイコノモス)という家計のやりくりに関するルーツがある。原始の時代より、人間が生活する限り、「自然資源」を何らかの方法で獲得し、やりくりする他ないのだから、その最適化を考える学問が登場するのも必然である。

初期の経済学においては「価値」とは何か、それは何によって生まれるのかが、大きな問題であった。例えば「人間である奴隷」よりも「貴金属」の方が高価なのはなぜか、ダイヤが生命維持に不可欠な水よりも高価なのはなぜかといったテーマである。そこで一つの解決案として出た考えに労働価値説というものがある。端的に言えばある財を得る過程で、人間がどれだけ頑張って働いていたかで価値が決まるという内容である。

ここで奇妙な状況が生じる。魚の減少など、自然が破壊されれば以前と同じだけの生活をするために、人間が行わなければならぬ労働が増え、生産された財の価値が増加する。つまり自然を破壊すればするほど、経済的な価値が増加することとなる。現代的な感覚ではなんだか奇妙に感じないだろうか?この話はひとまず置いておこう。

100年前における自然環境に関する問題は、土地、石炭や木材といった有用な自然資源の枯渇への懸念であった。経済学において「自然資源のやりくりの分析」も家計から国家へと規模を拡大しつつ重要となり、環境経済学もその解決のために発展していった。特に第二次世界大戦後に森林資源の枯渇や人口爆発による食料不足が懸念されていた。モデルに基づく精緻な研究の結果、技術進歩により資源の枯渇はさほど危機ではないといった論調もあった。資源の枯渇そのものに代替資源の開発を促す力があることと、希少になることでこれまで採掘できなかった資源の採算性が向上することが大きい(先ほどの話ともつながる)。実際、昔はやたらと石油の枯渇を耳にしたが、代替する資源の登場や、採掘技術の向上もあり案外なんとかなっている。

ここ100年における環境問題の大きな変化は、「環境容量」の不足という新たな問題の登場である。この問題は、資源としての自然でなく、私たちが使い終わった廃棄物を捨てる場所(環境容量)としての自然が枯渇するということである。100年間で人間の活動の規模が急拡大した結果である。この認識の転換のきっかけの一つに、ローマクラブによる『成長の限界』がある。同書は、技術革新等で食糧生産や工業生産が増大し、増え続ける人口を満たすことが十分であっても、経済活動による環境の汚染により破綻を迎えることを示唆していた。環境経済学も資源の枯渇から、環境容量の管理に向けて発展した。その成果は、案外、ごみの最終処分場の容量が(ぎりぎり)何とかなっていることにもつながっている。



自然を新たに活用した  
レクリエーションの調査(阿蘇市)



筆者が学部生時代に活動していた里山。  
耕作放棄地を少しずつ田んぼに戻していた

そして、新たな問題として、酸性雨やオゾン層の破壊等のこれまでとは性質が違う環境問題が続々と登場してきた。これは、自然が私たちに(無償で)提供してくれている「快適さ」が失われるという問題である。人間の活動が自然を根本的に変化させてしまうほどの力をもつようになったともいえる。規模としても地球規模での取り組みが必要な問題であり、地球サミット(1992年)にて今日のSDGsにもつながる「持続可能な開発」が掲げられている。

このあたり(1990年)で私が誕生するので、自分語りと共に日本の環境経済学の潮流を語りたい。日本における環境経済学は、欧米の枠組みにのっかりつつも、やや独自性をもって発展している。日本においては戦後の公害が環境経済学の出発点の一つである。公害は、資源の枯渇ではなく、「環境容量」を超えたごみを排出した結果として、生活の場としての「快適さ」が破壊される問題である。日本における環境経済学は、公害の解決を目的に、税制や助成といった政策的な実践を前提として研究が展開されていた。私が京都市立大学で師事した植田和弘先生(京都大学名誉教授)は環境経済・政策学会を諸先生方と協力の上、立ち上げにご尽力された方であり、日本における同分野を語る上では不可欠である。

ここでエコロジー経済学について概要を述べる。先述の自然が提供してくれる「快適さ」の喪失という新しい環境問題の解決のために、主流の環境経済学に対して批判的な形で形成された学問である。これまで無視されてきた自然環境を、生態系という社会経済と対になるシステムとして自然科学の見地からしっかりと認識し、その機能を社会経済的に評価することを目的としている。具体的には

自然が生み出してくれる、様々な「快適さ」、「環境容量」を「生態系サービス」として表現することで人間の労働と同様もしくはそれ以上に評価している。日本においては、やはり公害をスタートとして発展し、コモンズ論といったコミュニティによる資源管理論と結びつきながら発展してきた。学部生時代の同志社大学のゼミでは、当時はまだ珍しいエコロジー経済学を超実践的に学ぶことが出来た。ゼミでは、毎週日曜日に奈良と京都と大阪の境にある里山に(徒歩2時間弱を含めて)いつていた。このゼミ活動は私の原体験であり、現在の研究テーマとスタイルおよび健脚にもつながっている。

さて、最初に触れた労働価値説において自然破壊が推奨されかねないという問題に戻ると、実は財の生産において、素材を無償で作ってくれる自然のありがたさ、自然が豊かで快適なことの価値があまり考慮されていなかったといえる。「生態系サービス」はそうした部分を表すための表現であり、より現実に即した形に学問が発展したといえる。環境経済学においても生態系サービスの概念が取り入れられたこともあり、環境経済学とエコロジー経済学の区別はいまひとつとなってきている。

最後になるが、環境問題は時世の社会・経済活動を反映している。そのため、社会・経済の変化に合わせて新たな問題が発生している。私が入組んでいる自然資源の過剰利用問題も、そうである。ここまでに説明してきたように、資源が無くなることを心配していた100年前の(環境)経済学者にとっては耳を疑うような問題かもしれない。人間が自然環境にたよって生活する限りは、環境経済学はこれからの100年も重要な役割を果たす学問だと考える。



大学院生時代に取り組んだベトナムでの研究。  
過去の日本と同様の環境問題も



日本における代表的な公害である  
水俣病の原因物質が排出された百間排水口での学外実習



研究室の学生との自然歩道調査





100年に想うこと

# 1923年の「はじまり」から つながり環る建築の旅

## はじめに

本学、福岡女子大学は、来年の2023年で100周年を迎えます。迎えるということは「はじまり」があるわけでありまして、それが1923年です。

その1923年ですが、私はどうしても関東大震災を真っ先に思い浮かべてしまいます。それは1923年の翌年に、災害史、文化史、社会史そして建築史に残る「同潤会」の誕生につながるからです。ただ、これについては、もう少し後にお話ししたいと思います。

ひとまず関東大震災から離れて『別の視点から1923年について考えてみよう』、そう考えた時、『1923年生まれの建築家って誰がいるのかな』と、久しぶりにマニアックな思いがよぎり「日本の建築家」(注1)を開いてみました。すると1923年生まれの建築家の中に、私の好きな建築家、大高正人がいました。『ああそうだったな』と思い出しながら、私自身の建築の「ルーツ」と、つながりについて考え始めていました。

## 建築のルーツ

1923  
1975

1923年は、私の父方の祖父が生まれて3年が経った頃で、それから23年後の終戦翌年の1946年に父は生まれました。親族には建築屋が多く、その流れからか父は工業高校の建築科から、卒業後は大手ゼネコンに勤め、建築設計の道を歩みました。そして、私が生まれたのは1975年。1923年から半世紀を超える時間が過ぎていました。



(写真1)ピアノの発表会において



(写真2)広島基町団地



(写真3)母校の大学図書館  
(研究室があった棟の屋上より)

## 建築の道へ

1975  
1994

実は、私と姉は、地元ではコンクール入選もあり、ピアノ姉弟として少し名が知られていました(写真1)。音楽か建築か。悩んだ末、私は父と同じ建築の道を選びました。それが中学3年生の頃でした。その時、当時大手ゼネコンの設計部長をしていた父から「広島基町団地」は有名な建築だぞ。だから見ておいた方がいいぞ」と言われました(写真2)。『あの団地の何が良いんだ?』何も知らない私は疑問に思いながら見に行ったのを覚えています。そして後から設計者が「大高正人」ということを知ったのです。大高正人の建築とは、その後、進学(1994年)した大学キャンパス内(大学図書館(写真3))で再び出会うことになったのですが、ここで再びつながった《糸》は、それからの私の建築人生における《見えない糸》として、今に至るまでを導いてくれました。

### 環境科学科 准教授 若竹 雅宏

大学院修士課程を修了後、鈴木エドワード建築設計事務所に入所。2018年3月に18年在職した同事務所を退職し、同年4月より現職。住宅から公共建築までの幅広い建築設計の経験に基づき、地域住民が気持ちよく過ごすことのできる空間創りを目標として、特に「生活関連施設」を対象に、その計画・設計及び避難安全の視点から研究を行っている。公民館やコミュニティセンターなどの地域の集会施設を対象とした「地域集会施設における避難安全計画に関する研究」において博士(工学)を取得。一級建築士。

(注1) 新建築 12月臨時増刊「日本の建築家」, 新建築社, 1981

## 地域施設計画研究への萌芽

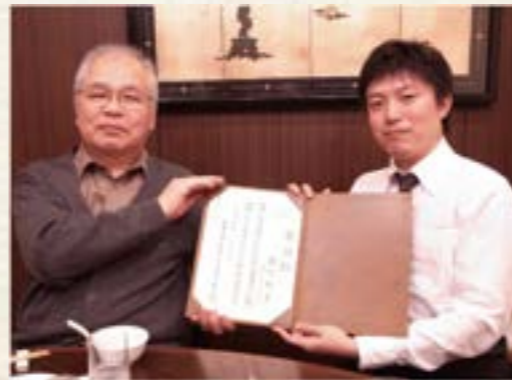
1994 / 現在まで

まず、その《見えない糸》は、思いも寄らないところでつながっていました。それは、父の高校時代の恩師が、私が入学した母校の建築史の教授となり、私も教えをいただいていたということです。その先生は「君はあの若竹君の息子か！」と驚かれ、私の知らない父の一面を垣間見ることができた、嬉しい出会いでした。

母校の大学図書館を設計した、大高正人は、近代建築の巨匠。前川國男の設計事務所出身であり、私が大学入学後まもなくして研究室の門を叩いた恩師（以降、「恩師」はこの先生のことをいいます）も、前川國男の元で修行を積んだ方でした。そのことを知っていて門を叩いたわけではなく、「何人かいた建築家の先生方の中で最も惹かれた先生だった」、それが理由だったと思います（写真4）。



(写真4) 写真中央に座っているのが恩師  
左から3番目が筆者(大学院1年次)



(写真5) 先生と博士学位授与式後のお祝いの席において

前掲の「日本の建築家」を研究室で読みながら、恩師の名前があることに驚きと尊敬を覚え、その後出版された「日本の建築スクール」<sup>(注2)</sup>にも、「前川スクール」のところにその名がありました。大高正人と同じ事務所の出身である恩師との出会い。この《見えない糸》は、更につながっていきました。それは恩師の一番弟子にあたる先生で、私の学位審査をいただいた先生（以降、「先生」はこの先生のことをいいます）とのつながりでした（写真5）。



(写真6) 世界平和記念聖堂

先生の出身は、福岡県小倉市で現在の北九州市になります。そこには1958年に竣工した「八幡市中央公民館（八幡市民会館）」があり、それは北九州が「都市型公民館発祥の地」と呼ばれる所以となっています。その「八幡市中央公民館（八幡市民会館）」を設計したのは、村野藤吾<sup>(注2)</sup>でした。村野藤吾は、私の出身地広島にある「世界平和記念聖堂」の設計者でもあり、私は今でも帰郷の際には、その「世界平和記念聖堂」に立ち寄り、神聖な空間で心身を清めています（写真6）。ちなみに私の卒業設計は、その「世界平和記念聖堂」を中心とした地区ヒエラルキーの中に存在する小学校を公民館などの地域集会施設と複合して新たに再生する計画案でした（15P写真）。

当時の私は、「建築は実学。設計して、デザインして、そして作って

なんぼの世界だ」と、研究室が掲げている地域施設計画研究とは距離を置き、建築作品・設計の方法論につながることはばかりに関心が向いていました。しかし、それでも地域集会施設だけは背を向けることなく向き合い、研究対象として全国の赴いた地域で数えきれないほど見てきました。その地域集会施設の代表格が公民館なのですが、今では私の研究室では公民館は外せない研究対象となっています。

## 女子・生活・住居

さて、ここで話を1923年に戻したいと思います。冒頭で私は1923年と聞くと「関東大震災と、それをきっかけに誕生した「同潤会」を思い出してしまいます」と話しました。

「同潤会」は関東大震災による震災義援金をもとに1924年に創設された財団法人で、震災復興に必要な施設を都市の不燃化と併せて建設することを目的としました。その代表的な施設が、いわゆる「同潤会アパート」です。私もいくつか見に行きました。特に記憶に残っているのは、「大塚女子アパートメント」。

文京区エリアを歩いていた大学4年次のある日、突如視界に現れた独特な佇まいの建築物をみて、なんとなくこれは「同潤会」系だなと思ひ記憶を掘り起こしました。場所は大塚。「ああ、大塚女子だ！」と気持ちが一瞬にして沸点を超えたのを思い出します（写真7）。



(写真7) 大塚女子アパートメント

今でこそ建築の計画は、生活面からアプローチすることが当然となつていますが、その視点は、戦後に住宅研究が進むまでは、あまり取り入れられていませんでした。その中において「大塚女子アパートメント」は、日本における最初の職業婦人専用のアパートメントとして1930年から2003年に解体されるまでの70余年の間、存在していました。そこには「女子目線から紐解く建築の姿」がありました。これは私の母校にあった女子のみの住居コースとも重なり、この女子目線の視点が大切であることを体感していたからこそ、《見えない糸》は私自身が女子大、しかも先生の故郷・福岡にある本学・福岡女子大の教員になるという、いたずらをしてくれたように思います。

## おわりに

長々と話してきましたが、私にとって現在に至るまでの人や建築との出会いは、全てが《見えない糸》で「筆書きの様につながっている感覚を覚えます。これは偶然という二文字では片づけられない何かがあると思わずにはいられません」。

さて、紙面が尽きたこともあり、私のお話しはこの辺で終わりにしたいと思います。こうして見てみると、人生は《見えない糸》《縁》でつながっているものだと思ひます。「全ては「関係性」から成り立っている」。この度は触れなかつた設計の師・鈴木エドワードもよく話していました。そのお話しは、またの機会があれば…。

(注2) 馬場璋造「日本の建築スクール」、王国社、2002

2022.5.19 木・6.8 水

## 学生委員の委嘱式とキックオフセッション

教職員から構成される学内委員会等に参画する学生委員に、全7委員会・部会の35名が委嘱されました。委嘱式では女性リーダーシップセンター長の豊貞教授から激励のお言葉をいただき、各委員長・部長からの委嘱状の交付や顔合わせを行い、期待とやる気に満ちた時間を共有しました。

キックオフセッションでは学年や学科を越えた全体交流を行い、リーダーの概念を学びました。学生たちは今後、身近な社会である福女大を創り上げていくプロセスで自分色のリーダーシップを発揮していきます。



2022.5.28 土

## 女性リーダーシップセンター キックオフシンポジウム

創立100周年記念事業の一環として、4月に女性リーダーシップセンターを設置し、キックオフシンポジウム(日英同時通訳付)を附属図書館/美術館において開催しました。寄附企業等関係企業や国内外大学の教職員、学生など、オンラインを含め180名を超える方々に参加いただきました。

シンポジウムでは、「自分起点で『ないものを描く』これからのリーダー」と題した基調講演をはじめ、九州における次代のリーダー育成拠点を目指す本学の役割や期待について、各界の女性トップリーダーに登壇頂き、様々な観点からのメッセージやご意見を頂きました。その後登壇者と会場・ウェビナー参加者間で活発な質疑応答が行われ、盛況のうちに幕を閉じました。



2022.5.12 木

## 第1回留学説明会

交換留学を目指す学生を対象に、今年度1回目の留学説明会をオンラインで開催し、交換留学制度の概要や申請方法の案内、海外協定校の紹介を行いました。今回の説明会は2部に分けて行い、第2部の留学経験者との座談会では、ベルギー、韓国、タイに留学中の学生3名が現地での勉学や生活について報告し、参加者からの質問に答えるなど、参加した約180名の学生たちにとっては留学生生活を具体的に知る貴重な機会となりました。



2022.5.14 土

## 体育祭

新入生同士の交流を目的として体育祭を実施しました。企画・運営は2年生の体育祭実行委員会が中心となり、新型コロナウイルス感染症対策をとりながら、チーム対抗のリレーやだるまさんが転んだ、〇×ゲームを行いました。初めのうちは初対面の人ばかりのチーム編成に緊張した様子の1年生でしたが、体を動かして協力してプレーしていくうちに打ち解け、終了時には笑顔で写真撮影をするなど学科を越えた繋がりができました。



2022.3.23 水

## 東香園 栄養セミナー 「食べてまもる健康生活」

本学に隣接する福岡市立老人福祉センター東香園主催の「高齢者対象・栄養セミナー」に食・健康学科の梅木陽子准教授が登壇しました。

講演では参加者(16名)に向けて、免疫力を高める腸の働きについての解説や食欲不振を防ぐ工夫、また低栄養対策のための食材や簡単な調理方法についての説明がなされました。

参加者はバランスのとれた食事の大切さについてメモを取りながら、熱心に耳を傾けました。



2022.4.17 日

## 開学記念式典

本学の発展を支えてくださる皆様に日ごろの感謝を込めて、開学記念式典を執り行いました。会場での開催は3年ぶりとなり、多くの同窓生や関係者でにぎわいました。

向井学長は「皆様との関係を大切にしながら『次代の女性リーダー育成』に取り組んでいく」とあいさつしました。また、翻訳家の関美和氏による記念講演や、学長による教職員・学生表彰を行いました。

来年2023年の創立100周年に向けて、一段と祝賀の機運が高まりました。



2022.1.21 金 ▶ 3.22 火

## マヒドン大学 Fridays with Conversation Corner

マヒドン大学(タイ)主催のFridays with Conversation Cornerがオンラインで行われ、マヒドン大学の学生22名と本学学生10名が参加しました。毎週金曜日に約1時間、会話を楽しみながら互いの国の文化を紹介しあい、交流しました。最終日のSpecial Cultural sessionでは、本学学生全員でタイの学生に折り紙を紹介しました。オンライン上でどのように折り紙を分かりやすく説明するか、学生たちが主体的に考えた甲斐あって発表は大成功でした。授業がない冬休みの期間に楽しく英語に触れながらタイの生きた文化を知ることができたと、学生たちはプログラムを楽しんでいました。



2022.3.17 木 卒業式・4.2 土 入学式

## 卒業式、入学式

新型コロナウイルス感染症対策のため、卒業式・入学式を代表学生と学内関係者、来賓の方々のみで式典を執り行いました。また、学生達は学科ごとの会場にて式典の様様をライブ配信で視聴しました。

卒業式では、学部生255名、大学院生15名が卒業し、キャンパスは晴れ着姿の卒業生で華やかな雰囲気になりました。入学式では、学部生242名、大学院生17名が入学し、海外からの留学生が入学の喜びを英語でスピーチする等、国際色豊かな式典となりました。



2022.8.7日

## 来校型オープンキャンパス

新型コロナウイルス感染症対策を講じた上で、来校型のオープンキャンパスを実施し、約300名の方々にご参加いただきました。毎回オープンキャンパスでは在学生スタッフ「広報サポーター」が中心となって企画・運営を行っています。今回もキャンパスツアーや寮紹介など、工夫を凝らした企画で参加者を案内しました。参加した高校生からは、「先輩方が丁寧に説明してくださり、とてもいい雰囲気に参加できた」「進学したい気持ちが高まった」などの声を頂きました。



2022.7.28木・8.4木

## ひらめき☆ときめきサイエンス

新型コロナウイルスがこれまでになく広がった第7波の最中、近隣小学校の5,6年生を対象に恒例の「ひらめき☆ときめきサイエンス:ナメクジはかきこい!〜ナメクジの学習行動と脳のしくみ〜」を実施しました。本企画は日本学術振興会の補助を受けて、これまでに5回、隔年で実施しています。一昨年の前回から、コロナ対策として参加者を2つに分けて2回実施するようにしています。今回は各日も応募者数が募集人数とほぼ同じになり、抽選を行うことなく希望者全員に参加してもらうことができました。



2022.7.4月

## なでしこ寮での防災訓練を実施しました

なでしこ寮にて、ナデシコナイト(寮活動)の時間を利用し、寮生を対象とした防災訓練を実施しました。地震発生および地震による火災発生を想定した2段階の訓練を行い、寮生は自分の身の安全を守る方法や、消火器の場所・避難経路などを確認しました。寮生からは「有事の際は落ち着いて行動しなければならないと思った」や「訓練をすることで安心できた」などの声が聞かれ、防災について考えることの重要性が認識できた有意義な訓練となりました。



2022.6.3金

## 福岡県立香住丘高等学校と 高大連携事業に関する協定を締結

福岡県立香住丘高等学校と高大連携事業に関する協定を締結し、調印式を行いました。今後は、これまで行ってきた理系分野における教育的連携に加え、国際的な学びや相互の授業見学を通じた教員間の交流など、より一層の連携を深めていきます。



2022.6.6月 ▶ 7.29金

## 十五代亀井味楽展

福岡市早良区に窯を構える、筑前黒田藩御用窯茶陶高取焼「十五代亀井味楽展」を附属図書館美術部門の企画において開催しました。今回の作品展では本学客員教授である十五代亀井味楽氏の作品の他、十四代・十六代嗣の3代にわたる作品を展示し、伝統の変容が感じられる空間を演出しました。会期中に開催した「初めての茶道」では、味楽窯の茶器でお茶をいただく茶会ということもあり、多くの学生や地域の方々に楽しんで頂ける時間になりました。参加者の皆様はお茶碗の持ち方や茶菓子の食べ方を学ぶことができ、お茶の世界が少し身近に感じられた様子でした。



2022.7.20水

## 第1回 新任・昇任教員による講演会

2022年度第1回目となる本講演会では、女性リーダーシップセンターの品川啓介教授、国際教養学科の村長祥子教授、環境科学科の豊貞佳奈子教授、食・健康学科の舟木淳子教授ら計4名の教員と、2021年度学内研修に参加した職員チームによる発表を行いました。教職員をはじめ、他大学や地域から延べ85名の方々にご参加いただき、質疑応答時には活発な意見交換が行われました。11月16日には第2回講演会を開催する予定です。



2022.7.1金・7.4月

## 自分とつなげて、 みんなで語る「参院選カタカタ」

社会課題を「自分ごと」にして語り合う「カタカタ」。昨年の衆院選時の活動をさらに発展させ、今回は参院選に向け5つのイベントをシリーズ展開しました。全32名の学生と教職員が参加し、投票方法など基本情報を確認したり、各政党の公約を調べ考え等身大で語り合ったりしました。当日は、普段多くの学生が感じている「政治」の話しにくさを覆し、みなさん語り止まらない様子。そんなわいわい語りから「政治」について「自分の考えに気づく時間になりました。参加をきっかけに「もっと調べてみたい」「ぜひ投票に行きたい」と話す学生も。さらに多くの学生に関心を持ってもらうべく、SNSでの情報発信も続けました。



(国際教養学科3年 松島 海咲)

カタカタインスタでの  
情報発信



## 海外留学インタビュー ~From and To~

2021年9月から国費外国人留学生制度※で本学に入学している留学生にインタビューしました。

Nadja Vitic (ナジャ ヴィティッチ) さん

大学院人文社会科学部言語文化専攻博士前期課程 日本語文化コース(セルビア共和国出身)



### 一もともと日本に興味を持ったきっかけは?

セルビアの高校では医学・薬学を勉強していましたが、外国語に対する関心がとても強かったので、大学では言語文学部日本語学科に入学しました。日本語を選んだのは、どんな言語よりも言葉の響きが綺麗だったからです。難しくても飽きることはないと感じ、日本語を学ぶことにしました。

### 一日本語で一番好きな言葉は?

一番好きな日本語は「幼なじみ」です。セルビアでは人同士の関係性が強く、みんな相手を非常に大切にしています。しかしセルビア語には、日本語で「幼なじみ」と一言で表現できる、関係性を意味する単語がありません。この違いは、日本語の語彙の豊かさを象徴するものだと感じました。

### 一福岡女子大学を選んだ理由は?

指導教員である橋本先生(国際教養学科准教授)の研究に興味を持ったことが最初のきっかけです。それに加え、橋本先生の学生に対する対応の良さ・優しさにとっても惹かれました。多くの学生が橋本先生のことを慕っています。そのような先生のいる福岡女子大学では是非学びたいと思いました。

### 一今のようなことを研究していますか?

主に第二言語としての日本語教育に関する研究です。現在は、特に第二言語としての日本語の読解教育について研究しています。また、日本文学やアメリカ文学なども一緒に学んでいて、とても勉強になります。

### 一日本と母国で違いを感じる点は?

母国の大学で日本語や日本文化について勉強していたので、日本に来て珍しいと感じることはあまりありませんが、驚いた事は、日本ではバンの値段が高いことです。セルビアにはバン屋さんが多く、例えば、ミルクバンは1つ50円ほどです。それに対して、日本ではバンがごほうびのようです。

### 一福岡女子大学のここが好き

学生同士みんな仲がいいところ!寮で生活していて、多くの友人に恵まれています。とても楽しい日々を送っています。

### 一これからの目標は?

大学院で研究を続けるか、日本で働くか…今はまだ色々と考えています。簡単ではないかもしれませんが、これからも頑張ります!

※国費外国人留学生制度:日本と世界各国相互の教育水準を向上させるとともに、相互理解、国際協力の推進に貢献することを目的に1954年に創設された、日本政府による外国人留学生招聘制度

## 企画展示を開催しました

2022年4月5日から同年6月3日の間、本学図書館棟1Fにて記念誌編集部会第2回企画展示「どこまで知ってる?福女大の学部学科」を開催しました。本展示は今年度の新カリキュラム開始に合わせて、女専時代から福女大の学部学科の変遷を追ったものです。本学の特徴であるリベラルアーツを軸としながら当時の学習内容を紹介することで、現在の学生や教職員、地域の方にとって本学を更に身近に感じることが出来る構成にしました。また、学部学科の歴史をたどることで社会の変化と、今私たちに必要とされている学ぶ姿勢を再考する機会になる展示を目指しました。

企画・運営の中心は矢野さくら、日高朱里、吉田小春(全員国際教養学科)が担いました。無事に会期を終えたことは、ご協力いただいた皆様のおかげと感じております。誠にありがとうございました。



国際教養学科3年 吉田 小春さん



国際教養学科3年 日高 朱里さん



## 記念誌を作成するとは

いよいよ、福岡女子大学100周年記念式典まで1年をきり、福岡女子大学百年史発行に向け本格的に活動が始まっています。では、どうして、節目となる年に記念誌を発行するのでしょうか。記念誌には大学に関する多くのことが記載されています。記念誌を読むだけで、学校が創立された経緯や、当時の学生がどのような志を持って学校生活を送っていたかなど、学校の雰囲気を知ることができます。実際、以前記念誌編集部会として行った企画展示を成功させるにあたって、福岡女子大学の50年・70年記念誌はとても大きな役割を果たしました。また、福女大についての歴史を文字に起こし、編纂したものを手に取ってその重さを感じると同時に、重さの分だけ歴史を肌で感じることができました。記念誌を発行するということは、歴史だけでなく、学生の思いを後世に伝え、目に見え、触れることができるものとして残すという大変重要な意義を持っています。

## 2021年度 全国栄養士養成施設協会 会長表彰

2021年度一般社団法人全国栄養士養成施設協会の会長表彰に、食・健康学科の前田詩乃さんが選ばれ、表彰されました。

この賞は、全国栄養士養成施設協会会長から栄養士養成課程または管理栄養士養成課程を、優秀な成績で卒業する学生に授与されます。前田さんは学業だけでなくオリジナルメニュー開発等さまざまなことに挑戦し、本学での4年間にわたる努力が大きな成果に繋がりました。



## 2022年度 春季西日本学生競技ダンス選手権大会 ラテン選手権大会 個人総合第4位

2022年度春季西日本学生競技ダンス選手権大会ラテン選手権大会において、国際教養学科4年の湯野ひよりさんが個人総合第4位を受賞しました。



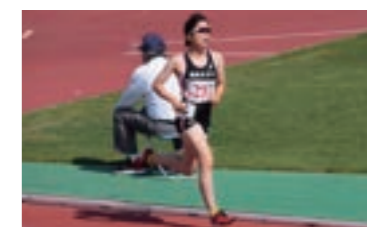
## 日本産業衛生学会 優秀査読者賞受賞

環境科学科の小崎智照准教授が日本産業衛生学会 優秀査読者賞を受賞しました。本賞は同学会の国際雑誌(Journal of Occupational Health)に投稿された論文を専門的な視点で内容のチェックを行い、多数の論文に迅速かつ的確に意見を述べ、学会に寄与した人に贈られるものです。



## 第92回九州学生陸上競技対校選手権大会 女子1500m 7位入賞

第92回九州学生陸上競技対校選手権大会の女子1500mにおいて、食・健康学科4年の西川優さんが7位に入賞しました。



# 人事消息 2022.4.1～2022.9.1付まで

### 教員

種別	所属	役職名	氏名	日付
新任	女性リーダーシップセンター	教授	品川 啓介	2022.4.1
	国際教養学科	准教授	近藤 洋平	
	国際教養学科	准教授	柴田 聡	
	国際教養学科	講師	Robert PRESLAR	
	言語教育センター	講師	Andrew GALLACHER	
昇任	言語教育センター	講師	Amy TOMS	2022.4.1
	国際教養学科	教授	村長 祥子	
	環境科学科	教授	豊貞 佳奈子	
	食・健康学科	教授	舟木 淳子	
	国際教養学科	准教授	櫻木 理江	
	食・健康学科	准教授	梅木 陽子	

### 職員

種別	所属	役職名	氏名	日付
退職	戦略企画センター		石井 佐代子	2022.4.30
	アドミッションセンター		加藤 歩	2022.8.31
新任	経営管理センター	センター長	黒岩 京子	2022.4.1
	学生支援センター	センター長	福里 和芳	
	学生支援センター	主任	坂梨 楓	2022.5.16
	100周年記念事業推進室		井上 雅子	
昇任	学生支援センター		川崎 由布	2022.5.23
	戦略企画センター		三宮 寛子	2022.9.1
	国際化推進センター	主査	馬場 広希	2022.4.1
	教務企画センター	主査	原田 正把	
	経営管理センター	主査	松木 健	
	IR・情報化推進センター	主査	森山 圭	
	経営管理センター	主任	秋吉 孝宏	

## 寄附者ご芳名

2022年2月1日から2022年7月31日までにご寄附いただいた皆様のご芳名を掲載させていただきます。  
 (これまでに公表の意思が確認できていなかった企業様においても、新たに意思確認ができた企業様については掲載しております)  
 ご芳名のご公表を希望されない方は掲載しておりません。  
 今後とも福岡女子大学100周年記念事業への温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。  
 ※本学ホームページにおいて、寄附開始以降、ご寄附いただいた皆様のご芳名を掲載しております(ご公表を希望されない方を除く)。

### 1

お名前・寄附金額の掲載についてご了解いただいたご寄附者様  
 (寄附金額別、五十音順にて掲載させていただきます。カッコ内の数字は累計寄附金額です)

#### 100万円

株式会社岩永組 様  
 上村 元子 様 (200万円)  
 株式会社篠崎 様 (300万円)  
 株式会社中野建設 様  
 人吉電気工事株式会社 様  
 福岡女子大学後援会 様  
 株式会社吉永産業 様

#### 60万円

株式会社東九 様

#### 30万円

株式会社川北電工 様  
 株式会社志多組 様  
 西邦電気工事株式会社 様  
 大徳電業株式会社 様  
 辻村 克江 様 (50万円)

#### 10万円

荒木商事株式会社 様  
 岡本 恵 様 (21万円)  
 株式会社オフィスK 様  
 遠賀信用金庫 様  
 株式会社菊川鉄工 様  
 久間 喜代子 様  
 斉藤建設株式会社 様  
 株式会社三基 様  
 重村善三産業株式会社 様  
 シンコー株式会社 様  
 株式会社新堀産業 様  
 Nigel,STOTT 様  
 早瀬 仁美 様 (110万円)  
 明星電気株式会社 様  
 株式会社森光商店 様  
 米盛建設株式会社 様  
 株式会社渡辺組 様

#### 5万円

帆足 靖子 様 (25万円)

#### 2万円

荒木 真理子 様 (5万円)

#### 1万円

伊藤 直子 様  
 上野 淳子 様  
 櫻井 純子 様 (4万円)  
 タベンポート 瑩子 様 (4万円)  
 野上 寛子 様 (2万円)  
 廣吉 宣子 様 (4万円)  
 松岡 サエ子 様 (3万円)  
 松崎 美和 様

### 2

お名前だけの掲載についてご了解いただいたご寄附者様  
 (五十音順にて掲載させていただきます。カッコ内の数字は累計寄附回数です)

あ アオヤギ株式会社 様  
 赤木 多紀子 様 (3)  
 天本 堯子 様  
 有村商事株式会社 様  
 株式会社市坪建築 様  
 株式会社稲盛機工店 様  
 上田 和子 様 (3)  
 株式会社植村組 様  
 白杵 啓子 様 (2)  
 内田 綾子 様 (3)  
 内村 世津子 様  
 株式会社栄電社 様  
 江頭 勝子 様 (5)  
 株式会社王子工業 様  
 大島石油株式会社 様  
 大森 厚子 様 (2)  
 緒方 明子 様  
 岡村 紀子 様  
 小田 幸子 様 (4)

株式会社九南 様  
 協和機電工業株式会社 様  
 久保建設株式会社 様  
 黒崎播磨株式会社 様  
 高津原 智子 様  
 株式会社興電舎 様  
 光洋電器工業株式会社 様  
 古賀 桂子 様  
 小牧建設株式会社 様

さ 株式会社佐電工 様  
 山九株式会社 様  
 株式会社静岡塗装組 様  
 白鷺電気工業株式会社 様  
 杉村 直美 様  
 角 文代 様 (2)  
 西部電気工業株式会社 様  
 積水ハウス株式会社  
 福岡マンション事業部 様(3)

か 株式会社ガイアテック 様  
 鹿児島船用品株式会社 様  
 勝野 フサヨ 様 (3)  
 金光 真美 様 (2)  
 株式会社川原建設 様

た 株式会社武田建設 様  
 竹元 明子 様 (3)  
 多田 美千代 様  
 立石 邦子 様  
 株式会社寺原建設 様

株式会社戸上電機  
 製作所 様  
 戸田 裕子 様 (5)  
 トノカワ電業株式会社 様

な 長崎放送株式会社 様  
 中島 千代子 様 (3)  
 成松建設株式会社 様  
 株式会社南電工 様  
 南日キョーワ株式会社 様  
 西日本興産株式会社 様  
 二宮 明子 様  
 日本製鉄株式会社 様  
 野上電気株式会社 様 (4)

は 株式会社はせがわ 様  
 馬場 広希 様 (7)  
 林田 真由美 様  
 福岡県信用農業協同組合  
 連合会 様  
 公益財団法人ふくおか  
 公衆衛生推進機構 様  
 福里 和芳 様  
 株式会社ふくや 様 (4)  
 藤井 泰子 様 (2)

藤津碍子株式会社 様  
 株式会社堀内組 様  
 本田 正寛 様

ま 株式会社前屋敷組 様  
 株式会社増永組 様  
 株式会社松浦工営 様  
 松浦通運株式会社 様  
 株式会社松下運輸 様  
 松本建設株式会社 様  
 三菱重工業株式会社  
 九州火力部 様  
 宮坂 正子 様 (2)  
 株式会社明光社 様  
 株式会社明興テクノス 様

や 八木 良子 様 (6)  
 株式会社安川電機 様  
 柳瀬 留美 様 (3)  
 吉田 昌子 様 (3)  
 吉原建設株式会社 様

わ 株式会社ワールド  
 ホールディングス 様

# 100周年記念事業イベント

2022年8月9日(火)

## 福岡女子大学後援会様へ 感謝状を贈呈しました

福岡女子大学後援会会長の大場  
 巳佳子様に来校いただき100周年記  
 念事業へのご寄附のお礼として、  
 向井学長より感謝状をお贈りしまし  
 た。多大なご寄附をいただき、誠にあ  
 りがとうございました。



2022年7月16日(土)

## 日本航空社員に聞きたい 『航空業界のリアル』を 開催しました

当日は本学学生だけでなく、福岡県  
 立香住丘高等学校の学生も合わせて  
 60名近い参加者が集まりました。な  
 かなか聞くことのできない航空業界  
 の現状や、学生のうちにやっておくべ  
 きことなどを経験談も踏まえてお話し  
 いただき、学生たちにとって大変貴重  
 な経験となりました。



2022年6月15日(水)

## 地域清掃を 実施しました

2022年6月に近隣住民の方々への  
 感謝を込めて地域清掃を行いました。  
 当日は学生・同窓生・教職員で2グ  
 ループに分かれ、大学から香椎浜の海  
 岸まで歩きゴミを拾いました。  
 想像していたよりも多くのゴミがあ  
 り驚きましたが、地域の方々から「お  
 疲れさま」「ありがとう」とたくさん声  
 をかけていただき、地域貢献の一環と  
 して、大変良い経験となりました。



## 福岡女子大学 100周年 記念事業

未来を拓くまでこの花  
一人を育て、知を生かす

### 寄附報告

福岡女子大学100周年記念事業基金へのご寄附に、  
 心からの感謝を申し上げます。

	件数	寄附額(円)
計	1,581	202,970,726

(2022年7月31日現在)

### 領収書について

2022年2月1日から2022年7月31日までにご寄附いただいた皆様には、2022年8月末頃までに「福岡女子大学 百周年記念事業基金寄附金領収書」を発送しております。  
 この領収書は確定申告時に必要となりますので、大切に保管いただきますようお願いいたします。  
 また、ご寄附いただいた方で、領収書がまだ届いていない方は、お手数ですが、100周年記念事業推進室までご連絡いただきますようお願いいたします。

### お問い合わせはこちら

福岡女子大学100周年記念事業基金(募金)に関すること  
 〒813-8529 福岡市東区香住ヶ丘1-1-1 100周年記念事業推進室  
**TEL** 092-692-3200 **FAX** 092-661-2420 **Email** 100th-bokin@fwu.ac.jp